
〜Another story〜THE GATE

105×boskasu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another story THE GATE

【Nコード】

N5692L

【作者名】

105×bosskasu

【あらすじ】

REBORN！7巻でロメオの出現させた門の向こう側に興味はありませんか？

作者は気になってしかたないです……なので勝手に妄想してみました。

自作ゲームのシナリオの世界へツナ達には行ってもらいます！！

シナリオは未来編前に書いたもので大幅に訂正中です。ちなみにREBORN！のゲーム要素は入りません…多分。

戦闘シーンがありますので、一応（R15・残酷描写有）にして

あります。

P r o l o g o 《プロローグ》 (前書き)

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃないかと思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえればいいかなと…

Prolog 《プロローグ》

並盛町から少し離れた郊外にある並盛墓場。

幅5、6メートル程の堀に囲まれており、大人が4、5人横に並んでも通れるほどの石橋が一本架かっている。無意味に深い堀は何となく前方後円墳しきういんの周濠ほうを髣髴ふふつさせる。墓場を囲むように鬱蒼うつそうと茂る木々に覆われていて、一見して離れ小島のように見えなくも無い。平素は雑草が生い茂っているが、今はお盆の真っ最中の為墓石の周りや通路は、わりかし綺麗に整えられている。

既に辺りは暗く、整然と並ぶ墓石が月明かりに照らされて何とも言えない雰囲かも気を醸し出している。

実はこの並盛墓場、『消える』と評判の心霊スポットでもある。だから夜にはほとんど人が寄り付かない。

堀に囲まれた並盛墓場には橋が一本。つまり出入口は一箇所だけ。それなのに橋を渡って並盛墓場に入った人の数と、墓場から出て

きた人の数が合わないあはなと専らせんらの噂だ。

並盛墓場から出てきた人の数が入っていった人の数より、何故か少ないそうだ……

しかも、『並盛中学校風紀委員の巡回区域』にもなっている為、更に訪れる者は少ない。

どちらかと言うと、後者の理由の方が大きいのは言うまでもないだろう。

今日はそんな並盛墓場に、多数の人影が彷徨さまよっている。

P r o l o g o 《プロローグ》（後書き）

自作ゲームのシナリオを整理していたら御盆に最適なやつつけたので、短編小説の練習に書いた作品です。

旧素材サイトに推敲前の作品が置いてあります。

先読みしたい方は←から飛んでみてね！

<http://bosukasuu28.hp.infoseek.co.jp/>

誤字脱字などありましたら御指摘よろしく願います!!

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえばいいかなと…

Cancello del mondo diverso

《異なる世界の入り

並盛墓場に、ふわふわと仄かな蠟燭の灯りが漂っている。

トコトコトコトコ……

カツンカツンカツン……

夏虫が合唱する中、少年と子供が二人で墓場を歩いている。

トコトコトコトコ……

「はあはあはあはあはあ……」

先程から、子供は少年の歩幅に付いて行くために半ば走っている。

息切れしながら走る子供は牛柄の全身タイツ姿で、天然パーマのもじゃもじゃ頭。ボヴィーノファミリーからの傍迷惑な預かり者、

ランボである。ちなみに飴玉と葡萄ぶどうが大好きな5歳児だ。

トコトコトコトコ……

「はふはふはふ……くぴゃー」

意地で少年に合わせていたがどうやらもうそろそろランボは限界のようだ。

「ツナ、歩くの速いんだもんねー!!」

「あ、ごめんランボ。つい早足になってたかも……」

引きづられるように歩いているランボの方を見たツナは、一瞬誰もが知る有名な童謡『ドナドナ』が聞こえてきたとか……

（それにしても、ランボのやつ真夏にこの格好で熱くないのか？
？繋いだ手がベトベトして気持ち悪いし……はあ……）

ちなみに手がベトベトしているのはお菓子を食べた後、ランボが手を洗わなかったからである。ランボの全身タイツは、密かにボ

ヴィーノファミリーの工作人員によつて春夏秋冬の衣替えがなされているので問題は無い。今は夏用で意外に着心地は良いらしい。

ツナは自分の置かれた状況から現実逃避をする為に、意識的にどうでも良い事を考えながら歩調を緩めた。

ツナこと沢田綱吉は裏の世界では有名なマフィア、『ボンゴレファミリー』の十代目候補だ。現在ボンゴレ十代目を目指し、家庭教師のリボーンからスバルタ教育を受ける地獄の日々を送っている。

そんなツナとランボが夜中に何をしているかと言うと……

夏の風物詩『肝試し』の真っ最中だったりする。



ツナはリボンに言われた時間通りに集合場所の並盛墓場へ来て見れば、リボンしか居なかった。実は密かに京子とのラブラブ肝試しを夢見ていたツナだがその思惑も儚く消えた。

しかも同行者として現れたのはランボである。ツナは死ぬほどガツカリしたが一人で行くよりはマシだと思い、ランボの手を引いて肝試しに挑んだ。

ちなみに与えられた灯りは蠟燭一本だけ。果てしなく心許ない灯りを頼りに、二人はビクビクしながら矢印と看板が示す順路をひたすら進んだ。

「ええと…次は右だな。」

矢印の通りに右へ曲がった。

「あれは、前のペアだ!」

前方に獄寺とイーピンの後姿らしき影が見える。

「獄寺君!!」

ツナが声を掛けると、二人は立ち止まった。

「はい、なんすか〜」

くるり、獄寺が振り返った。

「「!!!!!!!!!!」」

ツナとランボは振り返った獄寺を見て息を飲む。獄寺の顔にあるはずのモノがないのだ。

目、鼻、口が何処にも着いておらず、つるんとしたのっぺらぼうだ。

「で、出たーーーー!!」

ツナはランボを巻き込んで尻餅を着いてしまった。

「ぎゃふん、イタイ…が・ま・ん…だもんね…」

引っ繰り返って頭を打ったランボは、じんじんと痛む箇所を押さえながら、いつもの台詞を吐いて泣くのを堪えている。

によき によき によき

「ヒーーーーー」

更にのっぺらぼうな獄寺の首がろくろっ首のように伸び始めた。

「くぴゃー、首が伸びたんだもんねー ツナーーーーー、怖いんだもんねえ！！！」

一度は我慢したが、今度こそランボはツナにしがみ付いて泣き出した。

「あわわわわわーーーーー！！！」

ツナはしがみ付いてきたランボを抱きしめて…っと言うかランボ

を盾にしてわたわたりしている。

「やったな、イーピン！」

そう言って釣竿を持ちながら獄寺が墓石の間から出て来た。

「ツナさん、ランボ驚いた！！！」

ペロンと伸びた首の先からイーピンが現れる。

「この肝試し、十代目を驚かせれば満足です！」

獄寺は満面の笑みで言った。

「な、何してんの獄寺君!!」

「あれ、聞きませんでしたか？最初はペア組んで墓地を回るだけだったんですけど、女子が脅かし役をやりたいって言い出して、脅かす側と脅かされる側に別れたんです。」

「な、なにそれ……聞いてないよう!!」

「ええと……多分、みんな脅かし役をやりがって、結局脅かされるのが十代目達だけになってしまったんで、言いづらかったんだと思います。」

(んなー、リボーンのやつ絶対面白がってる!!)

「それじゃー十代目、後がつかえてるんで俺らは退散します。」

獄寺はぺこりとお辞儀をした。

「獄寺君!!?」

「気を付けて行って来て下さい!行くぞイーピン。」

「わかった。ツナさん頑張っ!!」

二人は言いたいことを言って去ってしまった。

啞然とするツナと怯えるランボだけがその場に残される。

「ラ、ランボさんは恐くないもんね！…へへんだ、ユーレイいるなら出て来て見ろ！

ランボさんが成敗してやるぞー！！！」

ビクビクしながらもやけになってハツタリをかますランボにツナは呆れる。

「はゝ。止めろよランボ、本当に出て来たらどうするんだよう！！！」

ゴソゴソカサカサ

タイミングよく横の茂みの辺りから物音が聞こえ、二人はビクツとした。

「ウキヤーーーーおばけーーーー！！！」

「ひーーーー！！！」

ツナは恐る恐る音のした方を見てみると小動物らしき陰が去っていくのが見えた。

「……び、びっくりした。イタチかなにかか……」

「うぎゃー、ツナ。」

ランボは鼻水を垂らしながらツナの足にしがみ付いてベソをかいている。

「げ、ランボ鼻水付けるなよ！これに懲りたら変な事言うなよ。さっきのはただのイタチだし。」

ほら離れろって、歩けないから。」

「……ひつく……イタチ……う、ランボさん別に泣いてないもんね……」

……ちよつと油断したただけだもんね……ひつく……

……風邪気味だから鼻水が出たんだもんね……」

ひくひく言いながら何やら必死に弁解するランボ。

（意味分かんねえ……ってか思いっきり泣いてんだろう……）

「……はいはい、行くぞランボ。」

ツナは気を取り直してランボの手を引いて先へ進んだ。

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

誤字脱字がありました御指摘よろしくお願いします。

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえばいいかなと…

「ばーーーーー!!!!!!」

暫らくすると、なんとも可愛らしい声が二人を出迎えた。

（出たーーーーー!!!!!!京子ちゃん可愛いーーーーVV）

唐傘の格好で片足でケンケンしながら移動する様はかなり和む。
ツナは目じりを下げて萌えた。

（恐いっていかむしろ可愛い……でも驚いた振りをしてあげなくちゃ!）

「うわーーーー、出たーーーーー」

「うへー！ー、ランボさんぜんぜん恐くn……ふぎゃ」

ツナはランボが京子に向かって、余計な事を言い出さないよう口を押さえて抱え上げた。

「もごもごー！ー！ーもご（はなせー！ーツナ！）」

「なぐごはいねーかー！ー！ー！ー」

今度は以前見たことがあるコスプレをしたハルが、ダンボールで出来た歪こまじな包丁を持って現れた。

（ハル、ナマハゲの衣装まだ持ってたのか……っつか真夏にそれは絶対熱いって！）

ハルの脅かしに恐怖というよりは憐憫の情が湧いてくる。

（ここは盛大に驚かなくちゃな！）

「出たー！ー！ー！ー！ー！ー！」

お情けでツナは盛大に驚いた振りをした。

「ツナ、こっちよ!!」

肩をポンッと叩かれてツナはおもわず振り向いた。

「どろん!!」

「へっ?」

京子とハルの和む仮装で相当油断していたツナ。その視界にシヨ

ツキングなモノが映った。

「ぎゃー！ー！ー、本当に出た！ー！ー！！！！」

ツナは悲鳴を上げながら猛スピードで走り去っていった。

「ツナ君！」

「行っちゃいましたねツナさん。」

「言ったでしょ、大事なのはチームワークよ！！」

「さすがビアンキさんですー！ー。」

「うんビアンキさん凄い、やったねハルちゃん！！」

ハルと京子はパチンと手を合わせて喜んだ。

ツナを恐怖に陥れたビアンキのメークは実に精巧で、血だらけの腐った顔に本物の蛇と虫が付いている。

ちなみに使用している虫はリボーンの子分達である。

「さてと、本題に取り掛からなければいけないわ！」

ビアンキは「ふふふ」と企み笑いを浮かべる。雰囲気があり過ぎてかなり恐い。

「本題？ビアンキさんまだ脅かすんですか？」

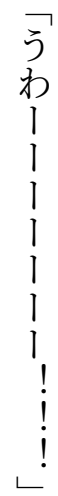
ハルは目敏く聞きつけ、瞳を輝かせながらたずねる。

「いいえ、ちょっと野暮用があるだけよ。二人はリボーンが迎えに来るまでここで待っているといいわ。」

「分かりました。」

「暗いですし気を付けて行って来て下さいね。」

「ええ、ありがとう。じゃあまた後で会いましょう。」



「おい、ツナ!! そっちじゃねえぞ……」

夕夕夕夕夕夕夕夕！！

ツナはあっという間に走り去った。

「どうしたのだ？」

慌てる山本の様子を見て、落ち武者姿の了平が山本の背後から這い出てきた。

「ツナのやつ、行っちゃいやがった……」

二人の間に微妙な空気が漂う。

気合を入れてこんな格好で待っていたのに、無駄になってしまった。

「……………」

「……………」

気まずい雰囲気、あはははと頭を掻きながら山本が了平を振り返る。

「……先輩……後、追いましょうか？」

「うむ。そうだな、待ってるだけというのはどうも性に合わん！
」

了平の瞳がギラギラと輝き出す。

行くぞ！っと叫んで了平はそのまま駆け出した。

「追いついて後から脅かすのも悪くないよな」

山本も名案が浮かんだとばかりに嬉々としてツナの後を追った。



「おい、ランボーー！！何処に行ったんだよう……………」

ランボを呼ぶツナの声は実に情けない。

ツナはビアンキに脅かされて逃げ回るうちに、何時の間にかランボとはぐれてしまった。郊外にある並盛墓場はかなり広い。我武者羅に逃げ回るうちに自分の居場所すら何処なのか分からない状態だ。

ツナは完全に迷子だった。

「どどどどうしよう、ランボを何処かに置いて来ちゃったよ………」

しかも夜の墓地で迷子なんてありえないから……………」

真っ暗な墓地にポツンと一人きりになり軽くパニックに陥っていた。

「はっ、蠟燭なくしたーーーー!!」

こえーーーーまじで、こえーーーー!!!!」

頼りの蠟燭も紛失したことに気が付き、更に孤独感が増す。

「ああー、どうすれば……」

ツナが泣きべそをかきながらおろおろと右往左往しているその時、

ポン

突然肩を叩かれた。

「うぎゃーーーー」

先程の恐怖が蘇りツナは悲鳴を上げ、頭を抱えその場に蹲うずくまった。

ぷるぷると震えるツナの頭上から呆れた声が掛かる。

「…………ボンゴレ、私ですよ。」

声を掛けて来た人物を確かめるために、ぎぎぎぎっと音がしそうなほど固まった首をなんとか捻る。

そこには無表情の大人ランボが立っていた。

「え…………大人ランボ……………何だ……………脅かすなよ。」

（良かったー！ランボのやつパニックって十年バズーカにあたったんだろうな。）

あははは…………と、力なく笑い息を整える小心者のツナ。その膝はガクガクと笑っている。

（それにしてもマジでびびったー。）

探し人に会えてホッとしているツナに、大人ランボの抑揚の無い声が掛かる。

「ボンゴレ、こっちだ。」

大人ランボは無表情に墓地の細い道を進んで行く。

「へ…………待てよランボ！」

その後をツナも慌てて追いかける。また一人で置き去りにされてはたまらない。

（そえれにしても何だろう、ランボのやつ何かいつもと雰囲気が違うような……）

無言で先に行く大人ランボに、僅かな違和感を感じるも首を傾げながら後に続く。

「ところでさ、何処に向かっているんだよ？」

（もうだいぶ歩いたよな……この墓地ってこんなに広かったかな？?）

「もうすぐ着く。黙って着いて来い。」

「う、うん……分かったよ。」

小心者のツナは強く出られると反射で受身になってしまう。

（何だよ、ランボのくせに。今日はやけに機嫌が悪いみたいだな

.....

でも、未来から来たってことは道を知ってるんだよね！？）

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

誤字脱字がありましたら御指摘をよろしくお願いします。

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえればいいかなと…

「ここだ、ボンゴレ。」

「ぶほっっ」

早歩きで進んでいた大人ランボが急に立ち止まり、ツナは大人ランボの背に顔面から激突した。

「急に止まるなよ……一瞬星が見えた気がする……」

ツナは痛めた鼻を擦りながら大人ランボに抗議する。

「この門の中だ。」

ツナの抗議など歯牙にもかけない様子で、大人ランボは指し示す。

そこには大きなメタリックな門がどんと構えていた。

「のわっ……なんだよこの門、さっきまで無かったよな？」

（中って何！？この門、滅茶苦茶怪しいんですけど！！）

ツナは怪訝な目を大人ランボに向ける。わき目も振らずにランボの後に必死に着いてきたといっても、こんなに大きな物体が視界に入らない訳が無い。

「くくくくくくくく……」

奇妙な笑い声を出す大人ランボにツナの腰が引ける。

「ラ、ランボ………冗談はよせつてば………何だよこの門は！」

「冗談なんかじゃないさ。さあ、共に来てもらうぞ。」

その言葉と共にメタリックな門が開く。

ギギギギギギー……

門の向こうを見た瞬間、ツナの背筋がぞくつとした。門の奥は真

っ暗で何も見えない。底知れない奥深さを感じ自然とツナは後ずさった。門から流れてくる冷たい空気は、真夏だと言うのに冷凍庫のように冷たい。

「なななな……ランボ? いったい………」

「さあ、早く。この中へ!!!」

逃げようとするツナの腕を掴み、大人ランボは門の中に引きずり込もうとする。

「待ってってば、行きたくないって!! はなせー! ! ! ! !」

足を踏ん張ってツナは力の限り抵抗した。

「若きボンゴレ!」

ツナの背後から聞き覚えのある声が掛かる。

(この声、まさか! ! !)

ツナが振り返ってみると、何と大人ランボがもう一人。

「ええええ! ! ! ! !ランボが二人! ! ! ?」

交互に二人を見比べるツナ。

「どうなってんの!!?」

「誰ですかそいつは。俺が本物のランボですよ!!」

「ちっ、邪魔をするなボヴィーノの若いの。」

ランボ?は舌打ちしてツナの細腕を掴み取る。

「まあいい、ばれたもんは仕方が無い。順番に殺してやる。」

ツナの腕を掴むランボ?はガラッと雰囲気を変え恐ろしい事を言う。

「殺すって、何言ってるの!!?」

「くくく……殺すってのは、門の向こう……死後の世界へつれて行くってことだ!!」

「な、死後って!!!!うわっ!!!!」

よくよく見てみればツナの腕を引いているランボの足が無い!!

「ああああ足が!!!!!!ま、まさか……………ロメオ……………??」

「ご名答だ、ボンゴレ。あの女に復讐する為にこの世に舞い戻って来た。」

あの女がビアンキを指すのは間違いない。

「あんたに怨みは無いが、あの女の仲間は全てこっちに引き込んでやる。」

恨むならあの女を恨め！霊力の強まる今日この日を待っていた
「！！！！」

ロメオはにやりと笑う。

「ひいひいひい、ランボーーーーーー、た、助けてくれ！！！」

大人ランボは引き攣った笑みを張り付かせてビクビクしながら後退した。

「…………ユーレイはちょっと……………」

「そんなーーーーー、たーすーけーてーーーーー」

ツナの身体は門の中にじりじりと引き込まれて行く。

「ランボーーーーーー!!!!!!」

「ぐっ……………ですからユーレイは……………」

涙を流しながら必死に自分に腕を伸ばすツナに、大人ランボは意を決する。

「やれやれ……………仕方ない、若きボンゴレには散々世話になった事ですし……………」

「サンダー セット!!!!!!」

ようやくやる気になった大人ランボは叫びながら角を頭に装着する。

ビリビリビリ、空から緑色に光る雷が大人ランボに降り注ぐ。

「行くぞ、エレットユリコ・コルナータ!!!」

ビリビリビリビリ

充電した電気がぶわっとランボの全身を包み、緑色に光る。

「ぬおおおおおお」

大人ランボはロメオめがけて突っ込んで行った。

「ちょ…………ランボの技って一度もあたったことないんじゃないー……」

ガッッ

「ぐおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ツナの心配をよそに、大人ランボの技はロメオにクリーンヒットした。

「当たった！！！！！」

思わずツナはガッツポーズをとった。

ロメオの拘束が解かれている事に気付いたツナは急いで門から遠ざかる。

バリバリバリバリ

「ぐわー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

電気に感電したロメオは目を見開いて絶叫する。

「あれ……何か………」

喜んだのも束の間、ロメオの様子がおかしい。

バチバチバチ

「何！！！！！？」

「あははははは、力だーーーー！！！！力がみなぎって来る！！！！」

両手をかかげて絶叫するロメオは禍々しい。

ランボの放った電気ので明らかにパワーアップしている。

「どうなってんのーーーーー元気になってる?????」

ロメオの変貌にツナの腰が抜ける。

「くははははは。見ろ、足まで実体化している!!」

恍惚としたロメオが己の足を見て言い放つ。

つられてツナも視線をやると先程まで無かった足が確りと生えている。

「んなー足がー!!!」

ロメオの変貌振りに大人ランボも青くなる。

「…………何か力を与えてしまったようですね。

電気と幽霊って相性が良いんですかね……………」

次の瞬間、更なる異変がロメオを襲う。

カーーーーー

ロメオから青白い閃光が迸り、光が墓地を照らし出す。

「うわっ、眩しい。」

「くっ………何が!!」

ツナと大人ランボは眩しさに腕で顔を覆った。

初投稿で編集が大変です……後からちょこちょこ変更すると思います。

とりあえず門が出るところまでUP出来た〜!!

この後REBORN!の素材サイトの方もUPしなくちゃ……昨日素材追加するって宣言しちゃったし。

誤字脱字がありましたら御指摘お願いします。

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえればいいかなと…

「凄い……………力が溢れるようだ。」

辺りに漏れ出た青白い閃光がロメオの中に収束する。

光は徐々に弱まっていき、暫くすると目を開けていられる程に収まった。

二人は恐る恐る目を開ける。

「……………!」

ロメオが直ぐ目の前まで迫っていた。

「面倒だ、二人まとめて引き込んでやる!!」

そう言うなり、ロメオは二人の腕をがしつと掴み門の方に引きずり込む。

「ひひひひひひ!!!!」

「おたすけーーーーー」

二人は必死に門のふちに縋り付き何とか堪える。

だがズズズッと少しずつ引きずり込まれてゆく。

二人がもう駄目だと思った瞬間、

「ロメオーーーーー!!!!!!」

ビアンキがポイズンクッキングを両手に持って走って来た。

その顔には、ツナを驚かせる為のメイクがそのまま非常に恐い。

幸い二人は引きずり込まれないようにしがみ付く事に精一杯で、
ビアンキの顔を拝むことはなかった。

だが、ロメオは確り顔を見ていた。

「ぐっ!!!!!!!!!!」

ロメオのただでさえ悪い顔色が、青白を通り越して白くなってゆく。二人の腕を掴む手がカタカタと震え出し拘束が緩まった。本物の幽霊のくせにビアンキが恐いらしい。幽霊になってもトラウマは消えなかったようだ。本人を狙えないからビアンキの仲間を襲ったのだろう。ツナにしてみればとんだとばっちりだ。

「邪魔よツナ、退きなさい!!!!!!」

ビアンキの声にハッと我に返ると、拘束が緩んでいることに気が付く。

（何か、拘束が緩んでる！！！！）

二人は隙を見てロメオの腕を何とか振り切り門から遠ざかった。

「た……たすかった。ありが……！！！！」

礼を言おうとビアンキを見た瞬間ツナの顔が再び恐怖に染まる。

獲物を前にしたビアンキの顔は、先程ツナが驚かされた時より更に迫力が増して恐かった。

「でたあああああ！！！！」

ドサリ

ツナは白目を剥いて気絶し、引っ繰り返ってしまった。

一方大人ランボは、ビアンキを見て腰を抜かしていた。

「ヒー……ボンゴレ……、おいて逝かないで……」

大人ランボは「ヒーヒー」言いながらも、ズルズルと這ってツナのもとへ近づいて行く。

「ひ、久しぶりだな……き、今日の俺は一味違うぜ!!」

ロメオもビアンキの迫力に気圧されて固まっていたが、大人ランボから得た力に後押しされ、何とか言葉を発する。

しかし、その顔は引き攣っていて説得力の欠片も無い。憐れだ。

「ごたくはどうでもいいのよ。」

「ぐっ………」

言った側から「どうでもいい」とあしらわれ、ロメオはかなりシ
ョックを受ける。

少しロメオの勢いが弱まった気のせいではないだろう。

「さあ、喰らいなさい！ポイズンクッキング？！^{スリー}！」

ぐしゃ

ビアンキの毒々しい料理がロメオの顔に命中する。

「グオッ！」

ロメオは泡を吹きながらその場に倒れた。

幽霊も泡を吹くのか疑問だが、多分力を得て実体化していたのがあだになったのだろう。

ぐしゃ

ひとあし遅れて、やっぱり大人ランボの顔にもポイズンクツキン
グが炸裂した。

「ぐはっ！」

折角、門から遠ざかり難を逃れられたと言うのに…悲劇だ。

大人ランボはようやく辿り着いたツナの腹の上に倒れ込む。

「ぐえっ!!!!」

大人ランボの倒れた衝撃のお陰でツナの意識が戻る。

「うううう……おもい………」

何事かと腹の上を見れば、大人ランボの顔から異臭を放つ煙がもくもくと煙が立ち昇るのが見えた。

「ちょ……えええええー！ー！、ランボ！！」

ツナは慌てて起き上がり虫の息になっている大人ランボを抱き起こした。

「ランボ、確りしろ！！！！」

大人ランボの身体を揺さぶった拍子にポイズンクッキングが剥がれ、白目を剥いて泡を吹く様子が露になった。

「！！！！！！！！」

いつもながらの役回りに大人ランボが心底気の毒に思えた。決して人事とは思えないツナだった。

「ビアンキ、何てことするんだよ！！！！」

ビアンキを見やると、清々した様子で顔のメイクをベリベリと剥^はがしている。

「スッキリしたわ。分身していたから2倍お得だったし。」

目的を達成させたビアンキの機嫌はすこぶる良かった。

「だから、こっちはロメオじゃなくて大人ランボなんだって……」

ボボーーン

程なくして5分が経過し、大人ランボは元通りの姿に戻った。

「すぴぴぴー、おれっち…もうたべられないんだもんね……」

戻ってきたランボは未来に待ち受ける悲劇も知らずに、気持ち良
さそうに眠っている。

「ランボ。元に戻ったんだ……大丈夫かな、大人ランボ……？」

（泡を吹いてたけど……いつも未来からピンピンして来るし、多
分大丈夫だよな……？）

最初は見捨てようとしたが、結局は手を差し伸べてくれた大人ラ
ンボに心の中で合掌するツナだった。
がっしょう

「居たのね、ランボ。」

未来へ帰った大人ランボを心配するツナに満足顔のビアンキが近
づいて来た。

既にビアンキの顔のメイクは綺麗に剥がされている。

「だらしのないわね、ツナ。膝が笑っているわよ。」

「こ、これは……」

ツナは見られた恥ずかしさに赤面して必死に震えを押さえようとする。先程から自分の膝の具合に気付いていたが知らないフリをしていたのだ。

（と、止まんない！ すごいー！ 恥しいー！ ってか、ここはスルーして欲しかったよ……）

「ランボをかしなさい、連れて行ってあげるわ。」

みかねたビアンキがランボを抱き上げる。

「ありがとう、ビアンキ。」

ランボは移動の振動で一瞬目を開いたが、ツナの腕より居心地が良かった為、そのまま目を閉じてくうくうと再び寝息を立てた。

「ツナ、私達は先にリボーンの所に戻っているわ。」

ビアンキはくるっと背を向けて歩き出す。

ロメオに報復し終えたビアンキは意気揚々と愛しい男の下へと急ぐ。

「えええ!! ちょ……待ってよビアンキ。」

こんな所でもう独りになんてなりたくないツナは慌てた。

「ビアンキ……って歩くのはやっ!」

未だに笑う膝を叱咤^{しった}し、追いかけようと中腰になったツナは、ふと気になってロメオが倒れている辺りを見やった。

「あ、消えた?？」

倒れていた場所にロメオの姿が無いことにホッとした。

「帰った……のかな？流石にビアンキのポイズンクッキングには勝てなかったのか。」

「ビアンキすげー。」

そう呟いた次の瞬間、

「いや、まだここに居るぞ。ボンゴレ！！」

背後から耳元に囁かれツナの背筋が凍る。

「……………」

いつの間に移動したのか、突如ツナの背後にロメオが現れた。いつもは異様に働く勘で気配を感じるのだが、相当油断していたようだ。とっさに反応できず固まるツナ。

「逃がさない……」

ロメオはガバツツとツナを羽交い絞めにする。

「ひひひひひひ……!!」

「お前だけでも道ずれにしてやる。」

「離せー！ー！ー！！」

ツナは何とか抜け出そうともがくも、膝が笑っていて踏ん張れない。

「ビアンキが行っちゃーう！！」

身体がままならないので、せめてもの抵抗にツナは大声で叫んだ。

「ロメオがー、ころされるー！ーうぎゃー！ー！！」

「ロメオですって!!!!」

ツナの悲鳴にビアンキが振り返る。だが、ビアンキの目はツナを捉えることが出来なかった。

「!!!!!!」

ツナの居た辺りから禍々しい青白い閃光が幾重にも走った。

まともに光を見てしまったビアンキの目に突き刺さる。暗闇に慣れた目の奥が痛みを覚える。

「何なの!!!!!!」

耐えがたい光にビアンキは腕をあげて目を覆う。

「くっ……」

光はパーッと辺りに拡散しあつと言う間に消えていった。

ビアンキは漸く光に慣れてきた眼をうつすらと開く。

「はっ……居ない……!」

そこには先程まで居たはずのツナとロメオの姿が何処にも無い。

あるのは閉じたメタリックな門だけ。無機質な門は異様な存在感を放っている。

「まさか……………!!」

ビアンキは嫌な胸騒ぎを覚えながら、警戒しつつ門に近づいて行った。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

もう少しで門に到達するという所で、地響きが鳴り響く。

音に呼応するように閉じた門が蜃気楼の様にモヤモヤと歪み出した。

「何なのいったい!!」

歪んだ門は下方から急速に透けてゆく。

「薄れてる!!?」

ビアンキは慌てて門に手を伸ばした。

しかし、スツと手が門を擦り抜け空を切る。

「なっ！！！！」

勢いづいていたビアンキは、あるはずの手ごたえを得られずに、手を切っ先に身体ごと門を擦り抜けてしまう。

「くっ」

ランボを抱いているビアンキは大きく体制を崩し前のめりに倒れ込む。

ザザザザッ

ビアンキはとつさに片手を地面に着き、腕を軸に円を描くように足をスライドさせて勢いを殺した。

なんとか横転を免れる。

「はあはあはあはあ……」

ビアンキは息を整えながら釈然としない思いを胸に立ち上がった。

「スピーーーー」

これだけの立ち回りをしたというのに、ランボはまだ気持ち良さそうに眠っている。

ビアンキはそんなランボを見てホッと息を吐いた。

そして擦り抜けた門の方を振り返る。

「……………」

そこには既に門は無く、
跡形もなく消え去っていた。

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o 《異なる世界の入り

10年後の大人ランボって15歳だから、全然大人じゃないんじゃない？
……ゴメンナサイ、突っ込んではいけないことですよね？？

誤字脱字など発見しましたら御指摘お願いします。

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえればいいかなと

「ふうーーーーー」

獄寺の吐き出した紫煙^{しえん}が、綺麗な満天の星空へ消えてゆく。

ツナを脅かせて満足した獄寺は一服していた。まさか墓石に寄り掛かるわけにもいかなかったので立ったままだ。

その背にはうとうとし始めたイーピンが乗っている。必死に睡魔と戦っているのかたまに振動が獄寺に伝わってくる。

「ふうー……あれは『アルタイル』か……そっ
ちのは、『北斗七星』だな。」

郊外にある並盛墓場には灯りが無いのでいつもより星が多く感じ
られた。

紫煙を吐きながらふと見上げた夜空には、ちらほらと星座がはっ
きりと見える。

（そういえば星座なんてずっと見ていなかったな……あの頃は
こんな風に悠長に星を眺める余裕なんてなかったし。）

獄寺は8歳の時自分の出自を知ると、汚い大人達に絶望し勢いで
出奔した。それからが大変だった。何の後ろ盾も持たない餓鬼が生
きていけるほど裏の世界は甘くなく、口では言えない様な凄惨な日
々を過ごした。心が休まる時など無かった。荒み放題でいつも傷だ
らけ。

それがどうだろう、今では嘘のように心が凧ないでいる。ほんの数
ヶ月前まで独り孤独の中に生きていたのが信じられないくらいに。

「全部十代目のお陰です。」

獄寺はたとえ独り言でも決してツナにタメ口はきかない。

ツナには重荷かもしれないが、とつくに命を捧げる覚悟は出来ている。空回りをする事が多い……というか殆ど空回りに終わっているが、ツナの為に何かしら行動を起こしたくてたまらないのだ。

最近はずっとツナの事で頭がいっぱいだった。そのお陰で7年にも渡って味わった辛酸しんさんを思い出す事も無くなり、それがあったからこそツナに出会えたと思えるようになった。

獄寺はこの歳でかなり汚れた世界を見てきた。だからツナには明るい日の下を歩き続けて欲しい。その為なら獄寺は何だってするだろう。

(生きる事が楽しい……………)

獄寺の心は生まれて初めて満たされている。

「ロメオがー、ころされるーうぎゃー!」

獄寺が幸福を噛み締めている最中、尋常じゃない断末魔が墓地に響き渡った。

「!!!!!!」

突然の叫び声に獄寺の手からポロリとタバコが落ちる。

同時に満たされていた気持ちが一気に醒めて現実に戻って来る。

「今のは十代目の声!!?」

何事かと獄寺が辺りを覗う。

「ツナさん……………」

叫び声で目を覚ましたイーピンも、目を擦りながら辺りを覗う。
そしてぴょんと軽やかに獄寺の背から飛び降りた。

「あっちの方からだ。」

獄寺の視線の先には青白い閃光が見える。そこへ向かって獄寺は
一目散に駆け出した。

「あ、まって!!」

慌ててイーピンも獄寺を追いかけた。



「十代目……！！何かあったんすか、何処に居るんですか？
?？」

「ツナさん、無事？居たら返事して！！」

獄寺とイーピンの呼びかけに答える者はいない。

「確かにこの辺だったはずなんだけどよ………」

だがツナの姿が見えない。

散り散りになっていた他のメンバーにも悲鳴は聞こえたらしく、

青白い閃光を放つ場所に駆けつけて来る。

獄寺達が来た方とは逆の方向から了平が猛スピードで突き進んでくるのが見えた。

その横に並んで山本も走る。

「沢田にいったい何があったというんだ?？」

「さっきの悲鳴はツナだよな?? ツナはどうしたんだ?」

ツナが見当たらない腹いせに二人に八つ当たりする獄寺。

「芝生頭に野球馬鹿、おせえぞてめえら!!!!」

間もなくして息を切らしながら京子とハルも駆けて来る。

「はあはあはあはあ、お兄ちゃんも来てたんだ。」

「はあはあはあはあはあはあ、京子ちゃん……以外に足速いです……はあはあ」

「ハル、あめえら十代目を見なかったか？」

獄寺は息を撒いて京子とハルにも訊ねる。

「見かけませんでした、はあはあ………ツナさんに何かあったんですか？」

「凄い悲鳴が聞こえたけど………大丈夫なのかなツナ君!!？」

答えを聞いて二人ともツナを知らないらしいことが見て取れた。

「ちっ、とりあえず手分けして十代目を探すぞ!! お前らはここに居ろ、十代目が来るかもしれないねえ。」

息を切らす京子とハルに獄寺は待つよう指示する。

「はい、分かりました。」

「うん、ここで待ってる。」

「俺らは十代目の搜索だ。」

「分かった。じゃあ、俺はこっちを探してくるわ。」

軽く手を挙げて山本は駆け出す。

「俺はあっちを極限に搜索するぞ!!」

「お兄ちゃん頑張ってね!」

相変わらず暑苦しい台詞を吐いて去って行く。

「俺はそっちに行くか……………」

二人とは別の方向へ獄寺も走って行った。

イーピンも獄寺に付いて行こうとしたが京子とハルに止められ共に待つことにした。



(十代目、何処に居るんですか?? 嫌な胸騒ぎがする……………)

汗だくになりながら必死に探すもツナは何処にも居ない。ちやうど前方から山本が来るのが見えた。

「はあはあ……………おい山本、十代目は??」

獄寺は荒い息をせいしながら言い募る。

「駄目だ、ツナは何処にも居ない!!」

山本も焦りを滲ませている。

「そんな…………十代目に何が……………」

落ち込む獄寺を見兼ねて山本が提案する。

「なあ、さっきの場所に戻ってみようぜ……………」

獄寺は山本の言葉に従って京子とハルの元へ戻ることにした。

そわそわしながらハルと京子は待っていた。

「獄寺君、ツナ君見つかったの？」

京子の言葉にツナがまだ見付かっていない事を悟り、獄寺の不安

が募る。

「やっぱり来てなかったか……………」

がっくりと肩を落とす獄寺は世界中の不幸を被った様な悲壮感が漂っている。

「獄寺さん、そんなに落ち込まないで下さい。きっとツナさんは見つかりますよ!」

「そうだよ、ツナ君はきっと大丈夫だよ!」

最早二人の言葉は獄寺に届いてはいない。

「俺がお側に付いていれば……………」

ついには土下座の姿勢で地面に頭をガンガンぶつけ出した。

「おい獄寺!! やめろって……………」

山本は驚いて獄寺をこれ以上頭を打ち付けないよう後ろから羽交

い絞めにした。

「離しやがれ野球馬鹿!!!!」

「落ち着けて!!」

「ごくでらさんダメ!! あぶない!!」

イーピンも止めに入る。身体が小さいので獄寺の足にしがみ付いているだけなのだが。

「どうしましょう京子ちゃん!!」

「ハルちゃんどうしよう……あ、イーピンちゃん危ないよ!!」

軽く修羅場だ。

どうしたものかとおろおろしているとハルの視界の端っこに動く影が映った。

ハルは思わずビシッと指差しながら叫んだ。

「あ、京子ちゃんのお兄さん!!」

ハルの声に皆の気がそれ何とか場が静まる。おのずと了平に視線が集まる。

皆の注目を浴びる了平は、何故かシュツシュツと拳を突き出しロードワークをしながら走って来る。

「先輩、ツナは居ましたか!!?」

山本は獄寺を押さえながら了平に聞く。

了平は羽交い絞めにされている獄寺の前まで来ると胸を反らせて言い放った。

「駄目だ、沢田は何処にも居なかったぞ。並盛墓場を5週して来

「ただだから間違いない!!」

嫌な沈黙が辺りを包む。

（5週ってこの短時間に凄いですね、京子ちゃんのお兄さん。でも胸張っ言う事じゃないですよね……）

沈黙する場面なのでハルは心の中でそっとツツコミを入れておいた。

獄寺はよほどショックだったのか静かになってうな垂れる。

山本はもう大丈夫だろうと思いつつと羽交い絞めを解いた。

「集まってるみてえだな!!」

無言の沈黙の中、頭上から声が掛かる。

山本達は何事かと上を見上げる。

そこにはリボーンがレオンジェット噴射を背負って飛んで来るのが見えた。

「ツナの気配は完全に消えたぞ。妙な気配がするとは思ってたがそいつと消えたみてえだな。」

「どう言う事ですかリボーンさん!!!!」

しゅたつと地面に降り立ったりボーンに獄寺が詰問しようとする。

「待ちなさい隼人!!! リボーンの言う通りよ。全てはあいつのせいだわ。」

今日という日の為に呼び寄せておいた3人の交霊師を引き連れて
ビアンキが合流した。

ツナが消えたので待機させておいた交霊師を呼びに行っていたの
だ。

「ぐはっ……………あ、あねき……………」

ビアンキの方を振り返った獄寺はビアンキの顔をまともに見てし
まった。

バタリ

案の定、獄寺はバタツとその場に腹を抱えて倒れ伏してしまう。

「獄寺、おいしっかりしろ!!」

慌てて山本が獄寺を抱き起こすがショックが重なり完全に意識を失っている。

「隼人!!」

ビアンキはランボをハルに押し付けると倒れた獄寺に駆け寄り、ぐぐぐと腕で山本を押して獄寺から遠ざけようとする。

「退きなさい、隼人は私が介抱するわ。」

「えっ…………いや…………止めたほうがいいと…………」

獄寺が目覚めた時の為に進言しようとしたが、ギロリとビアンキに睨まれて山本は固まった。

その隙にビアンキは獄寺を山本から奪い取り、そのまま自分の膝の上に獄寺の頭を乗せてしまった。

俗に言う膝枕というやつだ。その光景を山本は複雑な顔で見詰める。

（獄寺のやつ暫く目を覚まさないといいいけどな。）

「ビアンキ、どういう事か説明しろ。何か知ってんだろう？」

リボーンの間いかけにビアンキが頷く。

「ええそうね、ある意味私のせいでもあるし。」

皆なの視線がビアンキに集中する。

「单刀直入言うわ、ツナが攫^{さら}われてしまったの。」

「
「
「
「
「
えええええつーー」
「
「
「
「
「

獄寺ってツナが大好きですよねー。いつも空回りして報われて
いませんけど……

どうでもいいことなんですが、ビアンキの苗字って『獄寺』なのか
な???

『獄寺 ビアンキ』って微妙です……後で77を読み返してみよう。
知ってる方いましたら教えて下さい!!

誤字脱字がありましたら報告お願いします!

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえればいいかなと

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り口》

「単刀直入に言うわ、ツナが攫われてしまったの。」

「「「「「えええええっ——」
「「「「「」



驚愕の嵐の中、リボーンは相変わらずのポーカーフェイスでビアンキの横に移動する。

「どう言う事だ、ビアンキ？」

ビアンキはチラッと意味深に交霊師の一人を見る。

視線を向けられた交霊師は、かんぬし神主のようなおやうぎやう仰々しい格好のメタボなおっさんだ。歳の頃は50代半ばくらいで、身長が低く、薄い頭が夏なのに寒々しい。頭の側面から無理矢理持ってきた髪の毛は時々風に煽あおられて浮き上がっている。こんな時でもなければ爆笑ものだ。

——こんな時なのだが、ハルの口元は微妙につり上がっていた。目線は交霊師の頭に釘付けだ。

（ぷっ、ツナさんが大変な時だっていうのに……いうのに、浮いてる〜）

笑い声が漏れそうになってハルは慌てて自分の口を手の平で覆う。

必死に真面目な顔を繕^{つくろ}ってかなり引き攣^{ひきつ}っている。

「一月前になるわ。」

淡々とした口調で話し始めたビアンキに、皆な口を噤^{つぐ}んで耳を傾けた。

ハルも気を引き締めてそれに倣^{なら}う。

「そこに居るハゲの交霊師にたまたまショッピング中に会ったの。」

（ぐはっ！ビアンキさん……ハゲってハルと一文字違い……じやなくて！）

ハルはランボを抱え直す振りをして、キョロキョロと周りを見回すも皆な真剣な顔をしている。

メンバーの中でハゲに反応したのはどうやらハルだけらしい。

(ス、スルーなんですか？ ビアンキさんのハゲ発言は無視ですか
ーーーー！?)

ハルは一人だけ騒ぐわけにはいかなかったので込み上げるモノをグツと我慢した。そして、よせばいいのにどうしても気になったので、ハゲと言われた当の本人に視線を移してみる。

ガツクリと肩を落として小さくなっている。

$$(\text{!} \text{!} \text{!} \text{!} \text{!} \text{!} \text{!})$$

その様子に笑いが漏れそうになる。

（わ、笑っちゃ失礼ですよね……でも……可笑しすぎます……！）

なるべく視界に入れない方が身の為と判断しハルはビアンキに視線を戻す。

「そこでハゲに『男の霊が憑いている』って言われたのよ。」

（ヒー、ビアンキさん、ついにはハゲのみですかー！ー！！）

最早話の内容よりハゲ発言にドキドキするハルだった。

ビアンキの話の内容がほとんど頭に入ってこない。

（もしかしてハルってば何かを試されているんでしょうか！！？）

むろん試されてなどいない。

「そうよね、ハゲ？」

ビアンキに話を振られ、皆の視線が一斉にハゲ交霊師に突き刺さる。

その視線の強さにハゲ交霊師はたじろいだ。

「…………あ…………え…………はい…………。」

同意を求められたハゲ交霊師は青褪めて要領を得ない返事をする。
目に見えて様子が可笑しい。

と言うのも、実はこのハゲ交霊師、靈感がほとんど無いのだ。

若い頃はそれなりに見えたりもしていたのだが、歳をとるにつれて年々靈感が衰えていった。

今ではあてずっぽうな事を言っただけで相手を不安にさせ、そこを突付いて高額な除霊グッズを売りつけるまでに落ちぶれている。

いわゆる所謂靈感商法というやつである。

だから、まさか交霊術が成功するとは夢にも思っていなかったのだ。

しかも人が消えるなどありえない。

(ど、どうすればいいんだー！ー！！！)

親分風を吹かせてリーダーシップを取ってきただけに責任逃れが通用するとは思えない。

（何故こんなことに！！）

ハゲ交霊師はどうこの場を切り抜けるかで頭がいっぱいだった。

ツナがあっちの世界に旅立ったのでツツコミ担当はハルです。

オリジナルのサブキャラの名前が決まらなくてアットマークで代用して書いてます。フリーソフトにランダムで名前を決めてくれるやつありますよね。最悪アレで決めようかなと……

誤字脱字がありました報告お願いします。

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえればいいかなと…

一月前――

「へへへ、今回も随分儲かったな。」

そう言ってパンパンと財布が入った懷ふとろを叩くのは夏でも頭が寒々しいハゲ交霊師。

巧みな話術で結構な金持ちを上手いこと騙し、大金をせしめることに成功した帰り道なのだ。

大金を手に入れたことで気持ちが大きくなっているのだろう。締まりのないほくほく顔で、いつもは寄り付かないブランドショップ

が建ち並ぶ通りへ足を運んでいる。

「「ありがとうございます！」」

女性の軽快な声につられてふと歩道の反対側を見ると、某有名ブランドショップから若い女が店員達に見送られながら出て来た。

白い額^{ひたい}に真っ直ぐ筋の通った鼻、少し肉厚な魅惑的な唇。目元はサングラスに覆われて見る事は出来ないが、近づけば火傷しそうな危険な香りを漂わせている極上の女。長身でスレンダーなモデル体型なのに胸があり、重ね着されたキャミソールのV字型の胸元は、目のやり場に困るくらいセクシーだ。裏の世界で暗躍する者は決して近づきたがらない『毒サソリ』の異名を持つ女、ビアンキ。その手にはたった今出て来たばかりのショップのもの以外にも、別の有名ブランドのロゴが入った袋が幾つも提^さげられている。

ハゲ交霊師はしげしげとビアンキを見やり、ニヤリと厭^{いや}らしく笑った。

（――金の匂いをする。今日の俺はついてるな。）

羽振りのよさそうなビアンキを見て、無謀にもハゲ交霊師は次の標的に彼女を選んだ。

（アレだけ良い女だ。袖に^{そで}した男の一人や二人いるだろう……へへ）

瞬時に頭の中で作戦が立てられてゆく。

この歳まで拌みや家業で生き残ってきたのには、ひとえに人を見る目があったからだ。

だが、最近仕事が順調にいていたことで調子に乗り過ぎた。

ビアンキの放つ危険な香りを嗅^かぎ分けられなかったようだ。

（なんなの、あの男。さっきからこっちをじろじろ見て！）

ビアンキは先程から気持ちの悪い視線を投げかけてくる男に警戒を發した。

気持ち良く買い物していた気分が台無しである。

（どこかの刺客なの？ 気持ちの悪いハゲね。吐き気がするわ！）

ビアンキがそんな事を考えていると、ハゲ男がつかつかと足早に近づいて来る。

「……………」

近づいて来る不審人物に、ビアンキはサッと身構え動向を窺う。

（何なの、こっちに来るわ……）

目の前まで迫ったハゲ男に警告を発しようと口を開いたビアンキだが、それより早くハゲ男が言い放つ。

「貴女^{あなた}には男性の霊が憑^ついています。」

「……………何ですって!!」

ビアンキは一瞬呆気にとられるも、心当たりならあり過ぎるほどある事に思い至る。

「私には、はっきりと見えます!!」

相手の不安を煽^{あお}る為にハゲ交霊師は、見えもしない霊をさも居るように指差す。

「どんな奴なの!!? 言いなさい!!!」

ビアンキは相手に警戒する事も忘れ凄^{すご}い剣幕で話に食い付いた。

その様子に気を良くしたハゲ交霊師は調子に乗る。

「若い青年だ。あなたに強い恨みを持っている。昔^{……}の恋人かもしれないね。」

もちろん適当だ。こんなに良い女なら男の一人や二人袖そでにしているだろうと踏んでの発言だ。

どうやらビンゴらしい。

手に提さげていた袋をその場に投げ捨ててしまいうくらいに。

パリン

地面に激突した袋の一つから控えめな割れる音が聞こえた。

「あの……中身が……」

高価な物品なのは確あきらかなので、ハゲ交霊師は袋を指して問い掛ける。

「どうでもいいのよそんな物は。それより本当なのね、私に若い男の霊が憑よいているって言うのは。」

「勿論です。かなり貴女に恨みを抱いているようですね。」

「まさか、天然パーマの優男じゃないでしょうね!!」

「そうそう、天然パーマの優男です。実に貴女を恨めしそうに見ている。」

ビアンキの言葉を嬉々として反芻する。

（向こうから霊の情報を与えてくれるとは！実に幸先がいい。）

ハゲ交霊師の言葉にビアンキの中で半信半疑だった霊の正体が確信に変わる。

（間違いないわ、アイツよ！確実に殺ったと思っていたのに、最近よく現れるのはそのせいね。）

ビアンキは完全に大人ランボをロメオだと勘違いしていた。

「実は……私は拝み屋をやっておりまして、良かったら相談にのりましょうか？」

ここまで恨みが強いと時期に私生活にも支障を来たす恐れがありますよ。」

ここからがハゲ交霊師の本領発揮だ。ほくそえみながら物知り顔で嘯く。

ビアンキは腰に手をあて顎を擦りながら暫くその場で思案する。

「あなた交霊術は使えるのかしら？ 相手と話がしたいわ。」

「可能ですとも。」

もちろん嘘である。ビアンキからいくつか情報を引き出した後に、上手く霊がいるように見せかけるつもりだ。

「そう……いいわ、名刺を寄越しなさい。」

ハゲ交霊師はニヤケそうになるのを必死に押し留めて名刺を差し出した。

（上手くいった！！馬鹿な女だ。）

「それでは、連絡をお待ちしておりますので。」

そう言って内心を隠しながらハゲ交霊師はビアンキに頭を下げた。

その拍子に無理矢理脇から流している髪の毛がバサバサ崩れる。

（見れば見るほど気持ち悪いわね、このハゲ！！せいぜい役に立ってもらうわ。）

平素ならこんな親父に絶対近づかないビアンキなだけに、嫌悪感ひとしおは一人だった。

「ふん。気が向いたら連絡するわ。」

落とした袋を手荒に拾うとビアンキはその場を後にした。



ビアンキは万が一の事を考え、とりあえず他の交霊師にも視てもらった。

すると、

『貴女に物凄く執着していますね。怨んでいるようですわ。』（b y 神社）

『完全に取り憑いてますね。何故今まで気付かなかったのか不思議なくらいですよ。』（b y 教会）

彼等も一様にハゲ交霊師と同じ見解を示した。

お陰でビアンキはハゲ交霊師をすっかり信用してしまった。

やるからには徹底的にやる女、ビアンキ。

それからの行動は迅速だった。直ぐにハゲ交霊師以外にも二人の

交霊師を雇った。

リボーンが近々『ボンゴレ式肝試し大会』を墓場で行うと聞いて、
ビアンキは絶好の機会とばかりに交霊術チャンスを行うことを決めた。

それからトントントン拍子に事が進み今日に至ったのだ。

作者の姪っ子でもサクサクと読めるように結構ルビふってあります。
ウザかったら済みません。

誤字脱字がありましたら報告お願いします！

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえればいいかなと…

依頼を引き受けたものの、本当に霊が交霊するとは思わなかった
ハゲ交霊師。

共に交霊に参加した二人が本物だったのだろう。人が消えるなど
どうして想像出来ただろうか？

（か、帰りたい！！！！呪われるーーーー！！！！）

ハゲ交霊師は裸足で逃げ出した心境だったが、他の交霊師の手
前それも出来ない。

（お、俺の責任じゃないぞ。こんな茶番を考えたのはあのビアン
キとかいう女だ。

俺は悪くない！！悪いのは全部あの女だ！！！！）

なけなしのプライドとビアンキに責任転嫁することで、何とか自我を保っている。

（ふん、とんだ小心者ね。やっぱりこんな奴ハゲで十分だわ。こいつは駄目だわ。）

ビアンキは、おどおどと挙動不審なハゲ交霊師を見透かしたように内心で罵り、無視して話を進める。

「私はハゲの言う容姿から直ぐにピンときたわ、ロメオだってね。」

ハゲ交霊師はビアンキに皆の気がそれた事にホッとした。

そんな自分を、リボーンがじっと見ていた事には気付かなかったようだ。

「だから肝試しついでにあいつの霊を引きずり出してやったの。」

分身してたから二体ともポイズンクッキング^{スリー}?で始末してやっ
たわ。」

「さすがビアンキさんデングジャラスです……幽霊をやっつける
なん!」

「うん本当に凄いよ!」

ハルと京子はビアンキに尊敬の眼差しを向ける。

「あのさ……水を差すようでわりいんだけど、それが何でツナが
攫われる事になったんだ?」

言いずらそうに首を傾げながらビアンキに問う山本。

いつもビアンキから一方的に対抗心を燃やされているので少し苦
手なのだ。

特に獄寺が絡むと一層きつくあたられるのも謎だ。

ビアンキは口を挟んだ山本をギロリと睨みつけた。

「!!!!!!!!!!」

だがすぐに視線を外され山本はホッ息を吐く。一瞬生きた心地がなかった。

（獄寺の姉さんやっぱこええ）

「はあー」。

ビアンキは気を落ち着けるように長くて大きな溜息を吐いた。

「私とした事が……油断してロメオに一杯食わされたわ。

あいつは私にやられた振りをして欺き、目を離した隙にツナを連れ去って消えたのよ。

あの男、死んでからも本当に腹が立つわね!!!!」

ビアンキから発せられる一言一言には、ロメオに対する忌々（まいま）しさが滲（にじ）み出ている。

一体全体二人の間に何があったのか非常に気になる所だ。

ここまでビアンキに恨まれるというのもある意味珍しい。

どちらかというと、一度徹底的に制裁を下せばそれで気が済む性質（ち）だ。

まあ既に眼中に無いともいう。

もっとも性懲り（しよづつ）も無くおめおめとビアンキの前に、もう一度姿を見せようものなら問答無用で制裁されるのは必至（ひっし）だが。

ロメオのように死しても尚、執拗（しつよう）につけ狙（ね）われるのは稀（まれ）だ。

「ふん、折角高い報酬を支払って交霊師を呼んだというのに、無駄（むだ）だったわね。」

冷たい目でビアンキから一瞥^{いちべつ}され、交霊師達はビクリとする。

ビアンキはこう言っているが、交霊自体は成功したのだから彼らに非はないだろう。

^{もちろん}勿論ハゲ交霊師を除いてだ。

そもそも交霊を決行させたのはビアンキであり、交霊した時点で成功である。

彼らはビアンキが『霊と話がしたい』と言うから手を貸したのだ。

まさか霊に攻撃を仕掛けるとは……何て罰当たりな！

内心そう思っても決して口には出せないが。

「あの………よろしいでしょうか？」

気まずい雰囲気の中、交霊師の一人が重い口を開いた。まだ20代前半くらいの若い女性だ。

彼女は神社でよく見かけるような白と赤の巫女装束を身につけ、長い黒髪を白い紐で結んでいる。

少しキツめの切れ長の瞳が彼女をキリッと見せ、とても清爽せいそうとしている。

「私は榊さかき 桜華おうかと申します。並盛神社の巫女を務つとめております。」

そう言ってお手本の様な綺麗なお辞儀をした。思わず皆会釈を返す。

「お連れの方なのですが……もしかしたら、門の向こう側に連れて行かれたのでは……?」

最期は自信が無いのか語気が弱くなった。

「だろうな。」

ポツリと呟かれたリボーンの声を山本は聞き逃さなかった。

「なあ坊主、何か知ってんじゃないのか？」

「ああ、推測だな……ところでビアンキ、ロメオの側に怪しい門がなかったか？」

推測などと言っているがリボーンの読みが外れる事などまずない。既に確信しているのだろう。

リボーンの問いにビアンキはハツとして答える。

「ええ、不自然な門が通路にあったわ。あの時はロメオにポイズンクッキングを当てる事しか頭になかったから深く考えなかったけど、今思えば異様だったわね。最後に薄れていく門も目撃したわ。」

遠慮がちに桜華^{おつか}が口を挟む。その声は僅かに震えていた。

「来世と現世を繋ぐ門。年に一度だけ入り口が開くと言われています。」

並盛墓場では過去にも多数の行方不明者を出しています。

恐らく門の中へ迷い込んだのではないかと言われています。」

リボーンは頷いた。

「多分それで間違いねえだろう。」

「まさか……実在していたとは……！すごい……！来て良かったー
ー……！」

場の雰囲気にとぐわなない歓喜の声を上げたのは、事の成り行きを傍観していた3人目の交霊師。

3人目は他の二人と違い洋風な男で、牧師の格好をしている。

胸に掛かるシルバーの十字架は装飾がごつく、宝石らしき物が散りばめられていて一際目を引く。

金髪碧眼でかなかの美丈夫だ。ウェーブのかかった長髪をポニーテールにしている。

髪型は男に似合っているが、牧師としては異端な感じがする。

黙っていればいい男なのだが、口を開いた途端に道化のような軽い口調が飛び出し、どう見ても聖職者には見えない。

完全に牧師のコスプレ状態だ。

ちなみにビアンキからは『えせぼくし似非牧師』と呼ばれている。

「どの辺りに出現したんですか!!?」

かなり興奮気味にどの辺りに門があったのかをビアンキに訊ねる。

「……………」

「どんな門だったんですか!!?」

膝立ちになってビアンキに詰め寄る。

「……………」

ビアンキは鬱陶うつとうしそうに似非えせほくし牧師をみやり、完全に口を閉ざす。

リボーン以外の男などどうでもいいのだ。

「何色でした？ 大きかったですか？」

いい加減、KY男にイラつときて獄寺の髪を撫ぜるビアンキの手が力む。

それでもやはり無視を決め込む。

「……………」

一方リボーンは、似非牧師^{えせほくし}を幾分冷ややかな目で見ていた。

（間違いねえな、奴だ。どっかで見たことあると思ったんだ……………

まあここに何しに来たのかは大方の予想は付くけどな……………厄介だな。）

リボーンは様子見に徹する。

（ありゃー、リボーンは俺の正体に気が付いてるな……………めっちゃガン見されてるし！）

似非^{えせ}牧師は悪びれなくビアンキに詰め寄りながら内心冷や汗をかいていた。

「なあちよつといいか?……結局ツナは何処に行っちゃったんだ?

まだよく分かんねえんだけどさ? 門の向こうって何の話なんだ???

山本が詳しい説明を求める。

「そうです、ツナさんは一体全体何処に行ったんですか!! 門って何なんですか?」

ハルの言葉に京子も「私も知りたい」とリボーンを見詰める。

「良く分からんが、沢田が連れ去られたって言うなら連れ戻しに行けばいいのだ!」

「イーピンも手伝う!!! ツナさん助けに行く!!!!」

（ふふん、ツナのやつ結構人気者じゃねえか。良かったな心配してくれる奴がいて!）

リボーンはポーカーフェイスを崩さず、内心でニヤリと笑った。

ダメダメだった教え子が皆に好かれている様は、教師として悪くないなと思った。

「なあ、もう少し噛み砕いて話してもらえるとありがたいんだけど!」

山本がポリポリと頭を掻きながら言う。

「おめえら少し落ち着け。しょうがねえから順立って話してやる。」

「お願いしますリボーンちゃん。」

そう言ってハルは、抱いているランボをギュッと抱きしめた。

「門ってえのはな、あの世とこの世を繋………！」

突然リボーンは話を中断してしまった。

「どうかしたのか、坊主？」

山本が不思議そうに訊ねる。

「どうやら取り囲まれたみてえだな………」

硬い声とは裏腹にリボーンの口元は僅かに笑っている。

かなり前から気配には気が付いていたのだろう。

「!!!!!!!!!!!!!!」

「何だと!!!!!!!!!!」

リボーンの硬い声に何かをさっし、了平と山本はとっさに身構えて辺りの気配を探る。

確かに複数の気配がする。

不気味な雰囲気京子は、思わずハルの腕に自分の腕を絡ませて寄り添った。

「誰だ……!!」

山本が警戒しながら叫ぶ。

「それはこっちの台詞だよ。」

顔が識別できる位まで近づいて来た相手に、皆な驚きの声を上げた。

「
「
「
「
「
ひ、雲雀
(さん)
!!?
「
「
「
「
「

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

雲雀が出ました！

誤字脱字がありましたら報告お願いします！

C a n c e l l o d e l m o n d o d i v e r s o

《異なる世界の入り

リボーンの7巻「肝試し」参考

台詞と内容は都合の良いように微妙に変えてあります。

登場するキャラや設定は勝手な妄想入ってます。

原作にこんな設定無いんじゃない？と思われるかもしれませんが、アナザーストーリーなので流してもらえばいいかなと…

「「「「「ひ、雲雀（さん）！！？」

「「「「「

数名の風紀委員と共に雲雀が現れた。

雲雀はお互いの顔が識別できるくらいまで近づき歩みを止める。

風紀委員達は微妙な距離をとって待機している。

「君達、こんな所で何をしてるわけ？」

そう言って、雲雀は呆けた顔を晒している面々をぐるりと見渡す。

ざっと見ても奇妙な取り合わせだ。

気を失った獄寺にそれを膝枕するビアンキ、赤ん坊に怪しげな格好をした交霊師達。

見知った生徒（山本と了平）はお化けの格好をしている。

ついでに『群れている!!』

それだけで雲雀の機嫌は降下気味だ。

「先輩、どうしてここに………」

山本の呟きに雲雀が答える。

「パトロール中の風紀委員から連絡が入ってね。並盛墓場から妙な光が見えたって。」

夏の夜は何かと馬鹿をやらかす輩が多いから、嚴重に取り締まりをしているんだよ。

そして、見つけ次第噛殺す。」

雲雀は当然とばかりに言い放って肩を諫めた。

「で、君達はここで何をしているわけ？ 事と次第よっては、噛み殺すよ！！」

ちゃきつとトンファーを構える雲雀。

デンジャラスな雰囲気を感じ取ったハルが慌てて弁解する。

「ちちちち違いますよ、別に変な事はしてません。ハル達はここで肝試しをやっていただけです。」

夏の風物詩ですから！！！！」

「ふうん。でもここは風紀委員の監視区域で、午後の7時以降は立ち入り禁止。即刻退去してもらおうよ。」

「そ、そうだったんですか…知りませんでした。迷惑をかけてしまつて済みません。」

で、でもツナさんが…途中でいなくなっちゃったんです！探さないと！！」

「ツナって、あの草食動物の事だね。いなくなった？」

雲雀はハルからリボーンに視線を移し目で問いかける。

「ああ、ツナが門を通っちゃったんだ。この時期の門って言えば…雲雀、おめえなら分かるだろう？」

「門…通りで…。ねえ、それって草食動物はもう死んだってことだよね？」

したり顔で答える雲雀にハルが抗議する。

「ななななな何てこと言うんですか！！！！ツナさんは生きてますよ！！！！！！」

「そうだぜ……って、何で死んだなんて言うんだ先輩、何か知っているのか？」

山本の言葉に雲雀はチラッとリボーンをみやる。

リボーンは雲雀の視線に答えるように、僅わずかに首を横に振って『否定』を示唆しそする。

（詳細は不要……か。 さて……）

「……まあね。不思議な事は徹底的に調査しないと気がすまないし。」

詳細は話さない方がいいだろうと判断した雲雀は差し障りの無い事を口にする。

（さすがだな雲雀、話がはえーぞ。）

「で、どうする気だい赤ん坊？」

「もちろん連れも戻さねえとな！」

皆二人のやり取りに口を挟めず啞然と傍観する。

「もう門は消えたよ？」

雲雀はリボーンに言い聞かせるように問う。

「分かってるぞ。閉じた門はこじ開けるしかねえだろ。おめえも協力しろ、雲雀！」

「嫌だ………と言ったら？」

雲雀はどこかリボーンを試すような視線を投げかける。

「ふひ、これでどうだ？」

さっと懷から紙切れを出すと雲雀に放る。紙切れなのに距離のあ
る雲雀の手元に届く。

（何か今、紙の動きが凄かったような……………）

ハルは心の中で一人感心した。

雲雀は紙切れをチラッと見て学ランのポケットに無造作に突っ込
んだ。

その口元は楽しそうだ。余程良い事が書いてあったのだろうか？

「草食動物は並盛の生徒だからね、協力はしてあげる。でもこっ

ちはこっちで勝手にやるよ。」

「ああ、構わねえぞ。一人で大丈夫なのか？」

「あてはあるよ。じゃあね、赤ん坊！ 君達も早くここから離れる事だ。忠告はしたよ。」

くると背を向けると、雲雀は颯爽と風紀委員を連れて去って行く。

「ちょ、先輩!!?」

事の成り行きを見守っていた山本は、どうにかしてくれそうな雲雀が行ってしまう事に焦る。

「心配すんな山本、あいつなりに準備もあるだろうしな。」

「小僧がそう言うなら大丈夫か……」

「とりあえずツナの無事を確認しておかねえとな。一応あんなんでも次代のボンゴレだ!」



門に引き込まれたツナはゴツゴツとした砂利の上に転がっていた。

そこは干上がった川のような場所だ。ついこの間まで流れがあったように感じる。

そして、川に沿うように水分を無くした枯れ木がちらほらと見受けられる。

空は真っ暗で月も無いのに辺りは青白く照らされている。

明かりの源は無数に漂う鬼火のような青い炎。

何とも言えない幻想的な光景。

「んんっ……………」

硬く閉ざされていたツナの瞳が僅かに震えた後、ゆっくりと開かれる。

「ん……………ここは……………」

頭に霧が掛かったように思考がいまいち定まらない。

(夢……………?)

そう思っても仕方のないことだろう。

鬼火のような青い炎が漂い辺りが青く照らされている。

青い炎は偶たまに近づいてきてはツナを擦り抜けて行く。

熱くも冷たくも無いそれは何故だか酷く懐かしい感触がする。

上手く言えないが既知の感覚とでも言えば良いのか。

死ぬ気の炎を見慣れているからなのか、ツナは擦り抜けて行く鬼火のようなものを、それ程恐ろしいとは感じなかった。

むしろずっと触れていて欲しい。

（綺麗だな……………）

仰向けのまま漂う鬼火を観察していると、ザクザクつと砂利じやりを踏み締める音が聞こえた。

その音は徐々に近づいて来る。

「誰か来る……………」

長いこと同じ姿勢で眠っていたのか身体が強張こわばって上手く動かせない。

砂利^{じやり}の音の方に視線を走らせると見知った顔が見えた。

ツナの顔が恐怖に染まる。

「ひいひいー、ロメオ!!」

忘れていた記憶が一気に蘇った。

ツナの反応に気を良くした風のロメオは残酷な笑みを浮かべて、
ゆっくりとツナに近づいて来る。

「漸くお目覚めのようなボンゴレ」

「ようこそ、死者の世界へ！」

ここから先は完全にオリジナル設定の話になります。

まだオリキャラの名前が決まらないので次話のUPには少し時間がかかるかもです。

素材サイトの方も、ゲーム素材のツナのお家シリーズを完成させた
いので……興味のある方はのぞいてみてね！

U R L : <http://bosskasu.hanagumori.com/>

誤字脱字がありましたら報告お願いします。

U n m o n d o s p i r i t u a l e

《靈界》 — 1 — (前書き)

完全なオリジナルストーリーに突入しました。
ここからはオリジナルが沢山出てきます。

「成る程、君は肉体ごと門を潜くぐってこちらへ来てしまったんだね。」

これが彼の第一声だった。

◇
◇
◇

あの後ツナは、ロメオから逃れる為に我武者羅に走り回った。

そして当てもなく彷徨^{さまよ}っているうちにあることに気付いた。

いつの間にか自分が、先を行く鬼火を追っている事に。

その鬼火は他のよりも一際強く輝いていて、知らぬ間に先導してくれていたのだ。

ツナの超直感がアレに付いていけば間違いない！と告げていた。

冷たい暗闇の世界の中、孤独を感じずにパニックに陥^{おちい}らなかったのはこの鬼火のお陰だった。

どれくらい走っただろうか。

ツナは後ろが気になって仕方なかった。だがロメオがいたらと思うと怖くて振り向く事がなかなか出来ないでいた。

「ねえ、鬼火さん。もうロメオはいないかな？」

答えは返ってこないと分かっていたが話しかけてしまった。他に頼れるものはない。

すると、鬼火の速度が少し遅くなった。

「もしかして、もう大丈夫なの？」

ツナは勇気を振り絞って振り返ってみた。

そこにロメオの姿はなかった。

その代わりツナの周りを飛び交っていた鬼火が遅れながらも付いて来ていた。

「いない……」

ツナはホッとして走るのを止めた。前方の鬼火もツナに合わせる様に速度が落ちる。

それから暫くすると景色が変わった。

「うわー。綺麗だ。」

辿り着いた場所は最初に居た場所とは雲泥の差で、花が咲き乱れる美しい所だった。

群生する花は数百種類に及ぶだろう。普通と違うのは全ての花が青色をしてるところだ。

幻想的で現実味の無い世界。

そこにも鬼火の様なものは相変わらず漂っている。

だがその鬼火はツナに近寄っては来ることはなかった。

ツナは鬼火に導かれるように、絨毯じゅうたんのように咲き誇る花々を掻き分けて進んで行った。

「!!!!!!」

そこには花の中に埋もれるように、青色の中に異色の白色と紫色を纏まとった青年が静かに佇たたずんでいた。

白い長襦袢ながじゅばんの上に淡い紫色の羽織を腕を通さずに掛けている。

肌は白人の様に白く、長い髪は真っ直ぐで艶やかな濡れ羽色だ。

身長は高いが中性的な顔立ちで綺麗という形容が良く似合う。

青年からはロメオから感じた悪い気配が微塵みじんも感じられなかった。

やっこの思いで見つけた人に、ツナは心底安堵した。

ツナの気配に髪と同じ黒色の瞳が徐おもむろに動く。

二人の視線が交差する。

先に口を開いたのは麗人だった。

「成る程、君は肉体ごと門を潜^{くぐ}ってこちらへ来てしまったんだね。

」

ツナはその言葉に相当なショックを受け、啞然として固まった。

頭の中に墓場で聞いたロメオの言葉が何度もリフレインする。

ロメオの言った『死の定義』。

死とは門の向こうに引きずり込む事……

U n m o n d o s p i r i t u a l e 《靈界》— 1 — (後書き)

霊界つながりで『幽遊白書』の世界に行こうかとも思ったんです・・

だってオリキャラの名前考えなくてすむんですよー。でも折角書いたのでやめました。

今回出てきた青年の名前がなかなか決まらなくて・・・名前が出てこないところまでUPしました。なのでいつもより短いですー。

和風な名前を激しく募集中です！！次話は名前が決まり次第UPします。暫くお待ち下さい。

誤字脱字がありましたら報告お願いします！

U n m o n d o s p i r i t u a l e 《靈界》 — 2 — (前書き)

やっと名前決まりました！

>ツナside<

麗人はツナの間近に迫っていた。

呆然と立ち尽くすツナの肩を麗人が叩く。

ぽん

ビクッ

「!!!!!!!!!!」

ツナは突然の衝撃に飛び上がった。

(し、心臓が止まるかと思った!!!!!!)

ドキドキと激しく脈打つ心臓の上を押さえて深呼吸を繰り返す。

「はーはーはーはー……」

そんなツナを麗人は面白そうに見やり、にこにこしながら声を掛けてくる。

「ねえ、驚いた？ さわだつ なよし君。」

麗人が微妙なアクセントでツナの名を呼ぶ。

（なんか変な所で名前切れてる……）

今はそんなことより、何故見ず知らずの人が自分の名前を知っているのかの方が重要だ。

「……何で俺の名前を??」

（まさかこの人、リボーンみたいに俺の心を読むんじゃ!?!? それとも…ロメオの知り合いとか??）

疑問がツナの頭にもたげる。

「ふふふ……まあいいじゃないそんな事は。実に些細ささいな事だよ。」

「些細って……そうですか……」

「些細って……そうですか……」

なんだか気が抜けて行くツナ。

「あははははは、なーんてね。」

麗人はちょいちょいとツナの足元を指差す。

「だってそこに名前が書いてあるよ？」

「えっ!!」

麗人の指差す方を見ると……

「あああああああ!!!!」

（なんでこんなところに名前書いてあんの! ってかこれ絶対ランボの仕業だろ!!!!）

何故か白いスニーカーの爪先部分に、一文字ずつ違う色で名前が書きなぐつてある。

それも相当歪こまな平仮名だ。

右の靴には『さわだつ』、左の靴には『なよし』。

「まあ気にしない方がいいよ、『なよし』君! 名乗らなくても自己紹介できて便利だよ?」

ガーーーーーン

「違います！『なよし』じゃなくて『つなよし』ですから
！！！！

『沢田 綱吉』です。」

（この人わざとなの？それとも天然！！？）

「あ、そうなんだ？どおりで言いにくいと思ったよ！『さわだ
つなよし』君、だね。覚えた！」

納得したのか嬉しそうに頷いている。

（天然の方だったー！）

「つなよし…ツナ…ツナ君…つー君…つっちー…ツツ君…ツン
ツン。

いいね、うん。ツンツンに決定！」

楽しそうに独り言をしている麗人に、ツナは思い切り脱力して溜
息をを吐いた。

「はーーーーー。」

普通だったら靴を履く時に気付くそんなものだが、今日は肝試しの事で動揺していたツナ。

全く落書きに気付かなかった。

ツナは落書きを恨めしそうに眺めてから徐おもむろにしゃがんだ。

ゴシ　ゴシ　ゴシ　ゴシ

ズボンの裾で擦ってみると、汚く滲にじんでゆく。

どうやらクレヨンで書いたらしい。最悪だ。

「……汚い、最悪！」

しかし文字が書いてあるよりはマシだと思い、ツナは左右のスニーカーを擦って文字を消した。

ズボンの裾が汚れたが背に腹は変えられない。

「あゝあ、消しちゃった…便利なのに！」

見ていた麗人が不満の声を上げた。

（本気でそう思ってるの？この人…ってまだ名前聞いてなかったっけ。）

ツナが名前をたずねようとした瞬間。

「ツンツン。そう言えば、まだ名前言ってなかったよね。」

私は柊^{ひいらぎ}。ヒーちゃんって呼んでいいよ!」

タイミングよく自己紹介をしてきた。

(やっぱり俺の心読んでるんじゃない? しかも結局 『ツンツン』 に決定したんだ!!)

思わずツナの口元が引きつる。

「柊^{ひいらぎ}さんって呼ばせてもらいます……」

何故『柊さん』なのかと言うと…自分は普通に呼んでやろう、というツナのせめてもの抵抗である。

「ヒーちゃんって呼ばれたかったけど、まあいいや。」

ところでさー、ツンツンはどうやってここに来たの?」

「それは……」

柊ひいらぎの問いにロメオの事を思い出して、一気にツナのテンションが下がる。

（そうだった……俺、本当に死んだのかな？？どうすればいいんだよ、リボーン！！！！！！）

「実は……」

ツナは重い口を開いて、自分に起こった出来事を掻い摘んで話した。

U n m o n d o s p i r i t u a l e **《靈界》** **— 2 —** **(後書き)**

《ツナside》は前の話に入るはずでした。柊ひいらぎの名前が決まらなかったなので2話に分けました。

誤字脱字がございましたら報告お願いします！

U n m o n d o s p i r i t u a l e 《靈界》 — 3 — (前書き)

ツナファミリーSideは霊界に居ないのでサブタイトル迷いました……

ツナとファミリー交互に場面が変わったりするので難しいですね。

＞ツナファミリside＜

「あの…リボーン君、さっきツナさんの安否が分かって言っ
ましたよね!？」

「本当?リボーン君!!」

ハルと京子は期待の眼差しをリボーンに向けた。

「裏技がある。完璧じゃねえが……」

リボーンはそこで話を突然途切れさせた。

次の瞬間、

「うわぁ、凄いねリボーン!!どうやるの??.?」

突然幼い声が話しに割り込んできた。

皆が声の方に視線を向けると、先程までハゲ交霊師の居た辺りに、何時の間にかフウ太が立っていた。

フウ太の格好はヴァンパイアの姿で全身黒ずくめ。長いマントがふわふわと揺れている。

頭には大きな目のシルクハット。

帽子を押さえている手には白い手袋がはめられ、白色が暗闇にぼんやりと浮かび上がっている。

リボーンは無言でフウ太をじっと見詰めた。

「あれ、……いつの間に来てたんだ？」

山本はフウ太の近づいてくる気配を感じなかったので驚きの声を上げた。

「今までどこに居たんですか！無事で良かったです！」

「一人にしちゃってごめんね、フウ太君！」

ハルと京子は心配そうな表情でフウ太に問い掛ける。

「ツナ兄を驚かそうと思ってずっと墓石の後ろに隠れてたんだけど、待ってもなかなか来ないから探しに来たんだ。」

「そっか、悪かったな。皆な気が動転してて忘れてた！！」

山本はすっかり存在を忘れていたフウ太を前に罰が悪そうだ。

「極限に無事でなによりだ！」

意外に子供好きなの平はなにやら感動している。

「しょうがないよ、ツナ兄が誘拐されちゃったんだもん！」

フウ太の発言に一瞬リボーンの目がキラリと光った。

「あああああ、そうですよ。その手がありました！！！！」

突然ハルが叫んだ。

「ハルちゃんどうしたの？」

隣にいた京子は突然大声をだしたハルに驚く。

「私、名案を思い付いちゃいました。

フウ太君に『ツナさんの居そうな所ランキング』をしてもらえばいいじゃないですか！！」

ハルは以前ランキングをしてもらった時の事を思い出した。フウ太のランキングは外れたことがない。

ちなみに、その時のランキングの内容は『ハルのチャームポイントは何処でしょう?』や『ハルのツナさんの好きなどこランキングベストスリー』だった。

フウ太がことごとく当てたので、ハルはランキングを完全に占いの一種だと勘違いしているのだ。

実際に『ツナの居そうなところランキング』をすれば、何かしら答えを得られるのは間違いないだろう。

ハルは瞳をキラつかせて、フウ太に期待の眼差しを向けた。

「……………」

フウ太はハルの視線を受けた途端に表情が曇った。

「ハル姉……………」

「はい?」

（はひっ、どうしたんでしょうかフウ太君?）

「実は……………今日はランキングブックを忘れてきちゃったんだ。ごめんね……………」

目をうるうるさせながら悲しそうに上目づかいに見上げてくる。

その仕草にハルは母性本能を^{くすぐ}慫慂された。

(可愛いですフウ太君!)

「い、いいんですよそんなの。急に言い出した私が悪いんですから。」

フウ太君、また今度お願いしますね!!」

「うん、その時はきっとランキングしてみせるよ!!」

そう言ってニパッと笑って見せる。

ハルはその笑顔に安堵する。

(良かったです!)

「ところでリボーン、ツナ兄は何処にいったの?分かるんだよね??」

フウ太は神妙な顔つきになって聞いてくる。

「さあな。」

リボーンの答えはかなりそっけない。

「それよりも……」

リボーンはじっとフウ太を見詰める。

「なあに、リボーン??」

フウ太は首を傾げてたずねる。

「てめえは誰だ？」

パーーーン

言うと同時に、リボーンはレオンを拳銃に変えたとフウ太の足元に一発打ち込んだ。

「「「「「! ! ! ! !」」」」」

突然のリボーンの暴挙に一同は哑然とする。

フウ太はヨロヨロと後退した。

「酷いよりボーン、僕はフウ太だよ!!」

パーーーン

目をうるうるさせて訴えるフウ太に向かって、リボーンはもう一発打ち込んだ。

今度の弾はフウ太の太腿ふとももに命中した。

「うう……く……く……」

弾を受けてフウ太はよろめきながらその場に膝をつく。

「きゃっ!!」

「どどどどどうしちゃったんですかりボーン君。大丈夫ですかフウ太君!!?」

「小僧!!」

「何なのだ!!!!」

「キケン!!リボーンやめる!!」

この騒ぎにもかかわらずランボはハルの腕の中ですよすやと眠りこけている。

「おめえら動くな!!」

リボーンはフウ太に近づこうとする皆を制止した。

困惑の表情でメンバーはリボーンを見た。

ハラハラしながらも大人しく動きを止めたメンバーを確認するとリボーンが口を開く。

「何者だてめえ。」

一時でもフウ太がランキングブックを手放す訳ねえだろ。

それに、ここにいなかったのにずいぶんとツナの事を知ってんじゃないねえか。

正体を見せやがれ!!」

パン、と膝を着くフウ太に向かってもう一発撃ち込んだ。

フウ太は肝試しに漫画では登場しなかったと思います。アニメの方では登場します。でもかなりうる覚えなんです。

適当に格好はヴァンパイアにしちゃいました。

変な所で切っちゃったかな……一話を2千〜3千文字に設定してるもので。

誤字脱字がございましたら報告お願いします！

「…………ぐっ…………」

フウ太はガクガクと震えながらうずくま蹲る。

「何言ってるんだ小僧!？」

痺れを切らした山本が叫ぶ。

「山本、奴をよく見てみろ。」

メンバー全員の視線がフウ太に注がれる。

突然フウ太の震えがピタリと止んだ。

ムクリ

操り糸に引き起こされたかのような不自然な動作で起き上がった。

うつむ俯いていた顔を上げてリボーンに視線を合わせると、顔を歪めて口を開いた。

『あーあ、こんな姿になっても全く意味なかった。餓鬼にバレバレだし、損したな……』

ふてぶてしく言い放ったフウ太は、ぶわっと全身から噴出した真っ黒な炎に包まれてゆく。

「「「「！！！！！！！」」」」

炎からは背筋が凍るような嫌な感じが出ている。

『くくくくくくく……ふふふふふ、あひやひやひやひやひやひやひやひやひや！！』

けたたましい笑い声を立てるフウ太の顔つきが、みるみる凶悪になっていく。

「きゃっ…」

「ひっ……」

フウ太の変貌に京子とハルが後ずさりをする。

怯える二人を見て了平は背に庇うように一歩進み出た。

「貴様―――偽者だったのか。本物のフウ太を何処にやったのだ!?!?」

フウ太の顔を歪めてキヒヒと嫌な笑いを零す。

『さあね。俺はずっとここに居たから知らないな!。』

フウ太の口からは、フウ太の声にかぶさるように低くしわがれた男の声が二重に発せられている。

その言葉にビアンキは辺りを見回す。ハゲ交霊師の姿が何処にも見当たらない。

「交霊師が一人足りないわ……………まさか!?!?!」

ビアンキはハツとする。

『そのまさか……………だぜ。ひひひひひ、初めから俺はこいつに交霊してたのさ。』

ビアンキは全く気付かなかった事に悔しさで唇を噛み締めた。

「そんな……………私が気付かないとは……………」

桜華^{おうか}もひどくショックを受けている様子だ。

何度か事前に今日の打ち合わせをしていたにも関わらず気付かな

かったのだ。

(どういう事なの?)

桜華^{おうか}は無意識に巫女装束の袖の中にしまっている数珠を握り締めた。

フウ太の偽者は桜華^{おうか}になどお構いなしに言い募^つる。

『この鈍感の役立たずは交霊師を名乗っておきながら、取り憑いた事にもさっぱり気付かなかったぜ。』

くそつまらねえから魂をじわじわと喰らってやった!!』

ビキビキビキ

黒く染まったフウ太の容貌が交霊師のそれに変わってゆく。

「ひどい……………」

傍観^{おうか}していた桜華^{おうか}は思わず目をそむけた。

一方、似非^{えせ}牧師は面白そうに場の行方を眺めている。

京子とハルに至っては見ておられず、目をギュツと閉じた。

イーピンも刺激が強かったのか了平の足にしがみ付く。

『俺は《荒神》、今日と言う日を待ちわびていた。あひやひやひやひやひやひや。俺は自由だ!!!!』

一人悦えつに入はいった様に恍惚こうこつとした表情を浮かべ、天を仰いで叫ぶ。

「ふん、《荒神》ってえのは腐あくりようっても神様だが、てめえはただの《悪霊》じゃねえか!!」

リボーンは吐き捨てるように言った。

『何だと、この糞餓鬼がー！ー！！！！！！』

リボーンの言葉に怒りを露にした《荒神》の目は血走り、口の端からは涎よだれが滴したたっている。

身体はフウ太なのに顔は交霊師のそれ。面妖なその姿に皆の背筋がゾツとする。

「き、気持ち悪いです」

「ハルちゃん……」

怖いもの見たさで声を荒げた《荒神》を見てしまったハルと京子。どちらからともなく思わず身を寄せあった。

ハルに抱えられているランボから「ぶぎゅ」という声が微わずかに

漏れたが目を覚ました様子はない。

「なあ小僧、《荒神》とか《悪霊》ってどういう事なんだ？ ハゲのおっさんは生きてんのか！？」

「もう遅い。俺が直ぐに気付かなかったくれえだ、完全に取り込まれちまつてる。

アイツはこの世には戻れねえだろうな。」

「なっ……許せねえ……」

山本は持参していた『山本のバット』を《荒神》に向けて構えた。

「止める山本、コイツに普通の武器は通じねえぞ。」

リボーンの言葉に山本は顔を歪める。

「くそっ……どうすれば……」

「一先^{ひきめ}ずこの場は逃げるしかねえな。」

「逃げるって……」

「あの、多分アレは並盛墓場からは出られないはずですよ！」

桜華^{おうか}が口を挿む。

「そうか。なら俺^{しはら}が暫く時間稼ぎをしてやる。おめえらは何としても並盛墓場の外へ出るんだ。」

「^{さか}堀は並盛墓場の橋です。渡ってしまえば追っては来られないでしょう！」

『ふはははは。貴様ら、させると思っているのかーーーーー!!』

《荒神》の口がカパッと異様に大きく裂ける。

ボロボロボロボボーーーー

《荒神》は大きく裂けた口からドス黒い炎の固まりを幾つも、リボーンたちめがけて吐き出した。

「「きゃーーーーー」」

パン　パン　パン　パン

リボーンはレオンを素早く巨大な鏡に変えて、黒い炎を跳ね返す。

「今のうちだ。早く行け、おめえらがいると、足手まといだぞ!!」

《荒神》は跳ね返された自らの炎に包まれて足掻^{あが}いている。

「分かった、任せたぞ!! こっちだ、急げ!!」

了平がイーピンの手を引き京子達に叫ぶ。

「リボーン君……気を付けてね。行こう、ハルちゃん。」

「はいです。リボーンちゃん直ぐに追いついて下さいね!!」

ハルはランボを抱え直すと京子と一緒に了平に続いた。

「桜華^{おうか}、あいつらと一緒に行ってやってくれ。」

「分かりました。」

桜華^{おうか}はハルの隣に付き速度を合わせた。

「獄寺は俺が背負って行きますよ。」

山本はそう言って背を向けてしゃがんだ。

ビアンキは一瞬山本の背に強い視線を向ける。

「……そうね。頼んだわよ、山本武。」

次の瞬間、山本の背に獄寺の重みが押し掛かった。

山本は素早く立ち上がる。

「よっと……」

山本は獄寺を確り抱え直し、《荒神》と対峙しているリボーンを一度みやる。

「坊主、きいつけてな！」

一言リボーンに声を掛けると、意を決したように了平達の後を追った。

ビアンキはリボーンを見詰めた。

（このまま残りたいけど足でまといになるのは御免ね。それに隼人も心配だわ！）

苦渋の選択だが愛する男を残してこの場は去ることにした。

「リボーン、気を付けて！」

「ああ、ビアンキ おめえもな。」

名残惜しそうに何度か振り向きながらビアンキも山本を追う。

残るはリボーンと似^{えせ}非牧師。

「リボーン、お手並み拝見といきたいんだけど、俺はビアンキさに付いて行くよ。」

「ふん。勝手にしやがれ！」

リボーンは似非牧師えせほくしを見向きもせず言い捨てる。

「じゃあ頑張って！」

そんなリボーンに似非牧師えせほくしは軽く手を挙げるとビアンキを追っかけた。

U n m o n d o s p i r i t u a l e 《靈界》 — 4 — (後書き)

フウ太が大変なことになりましたが偽者ですから!!

誤字脱字がございましたら報告お願いします!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5692/>

～Another story～THE GATE

2011年10月7日05時45分発行